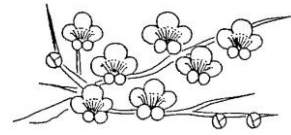


(2) 現在使用している漢詩・ポエム

① 「梅」

山の谷間の奥深く
 小さな村があったんだ
 家は四、五軒 さみしいな
 誰も来ないよ さみしいな
 ところが村人 梅の木植えた
 それから後の 谷間の春は
 花見の人で 大にぎわい
 (中山 善照)

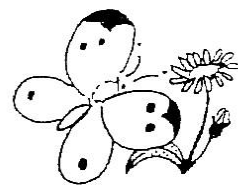


(原詩) 「画山水」 後五―二―
 溪村三五戸 溪村の三五戸
 一向絶風塵 一向風塵を絶す
 自種梅花後 梅花を種えて自り後
 春来引外人 春来外人を引く

【大意】 谷あいの三戸か五戸のさみしい村は、俗塵から離れて生活していた。ところが、梅の花を植えてより後は、春が来れば方々から花見の人が来るようになった。

② 「蝶」

花の香りは すこいんだ
 ずっと遠くに すぐ伝わってるぞ
 ほら「らん
 あの蝶いっぴき 西から来たし
 この蝶ひらひら 東から来ただろう
 (中山 善照)



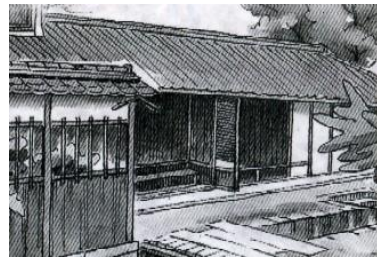
(原詩) 「蝶七首」 後八―二―
 一花香幾陣 一花の香 幾陣ぞ
 已覚両辺通 已に覚ゆ 両辺に通ずるを
 一蝶自西至 一蝶 西自り至り
 一蝶来自東 一蝶 東自り来たる

【大意】 ひとつの花の香りが四方へ伝わっている。すでに東と西の両辺に、香りが通っているのが知られる。それは一匹の蝶は西から来るし、一匹の蝶は東から来た。

③ 「廉塾」

庭をおおった 柳の木陰
 きれいな水が 流れる小川
 弟子たちしずかに 硯を洗う
 すずしい瀬音が 聞こえてくるよ

(武村 充大)



(原詩) 「即事」

後四一六

垂揚交影掩前楹 垂揚影を交えて前楹を掩う
 下有鳴渠徹底清 下に鳴渠の有りて徹底清し
 童子倦来閑洗硯 童子倦み来たつて閑かに硯を洗えば
 奔流触手別成声 奔流手に触れて別に声を成す

【大意】 柳の枝の影が家の前の方をおおって涼しそう

だ。その下にせせらぐ一筋の清流があり、水の底が見えるほどに澄んでいる。弟子たちが稽古に疲れて休みがてらに硯を洗っている。速い流れが手に触れて音が変わった。

④ 「晚秋スケッチ」

午後の陽は 小春日和のゆるゆると暖かく
 されど草むらを歩けば 露の華なお消えずして
 黄なる紫なる 枯れ萎れし花の入り乱れて
 秋の名残の色模様
 かまきりひとつゆるゆると
 蘆の穂に止まりて わが立ち止まるをじっと見る
 やがてゆるゆると 蓼の花に移る

(中山 善照)

(原詩) 「秋日雑詠」(五) 後七一八

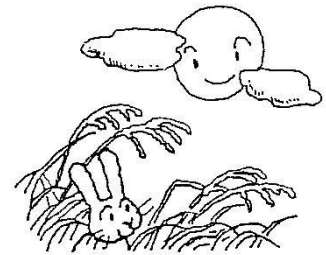
午暖叢間尚露華 午暖かにして 叢間なお露華あり
 残黄毫紫相交加 ざんこうぼうしあいこうか
 蠅螂熟視人來立 とうろう ひと きたりて立つを熟視して
 徐自蘆花移蓼花 おもむく ろかよ りようかに移る

【大意】 秋がふけたといっても、日中は暖かで、草むらの中には、

まだ露がある。黄色い花のすでに咲き崩れたのや、老いぼれた紫の花などが、相入り乱れて名残の秋を語っている。かまきりが立って見ている私をじっくり見ていたが、ゆっくりじっくり、じわーっと蘆の花から、蓼の花へ移っていった。

⑤ 「夕日」

夕日沈んだ 空まだ赤い
 田んぼの若苗 萌え重なって
 遠くで雷 どこかで雨か
 山のてっぺん 雲の中
 (中山 善照)



(原詩) 「所見」 前三一四

落日残紅在 落日残紅在り

新秧嫩翠重 新秧嫩翠重なる

遥雷何処雨 遥雷何れの処の雨ぞ

雲没両三峰 雲は没す両三峰

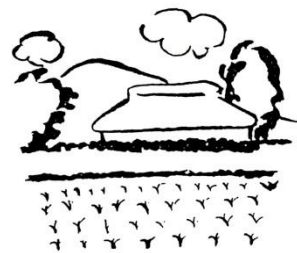
【大意】 入り日が西の空を赤く染めている。野山のみど

りにかこまれた稲の苗のみどりが更に目にしみる。遠雷の底鳴りはどこに雨を降らせているのか、みるみる雨雲がひ

ろがって、二つ三つの峰をかくしてしまった。

⑥ 「朝景色」

おひさま ぐんぐん 昇ってく
 お出かけからすの 背のあたり
 むらさき うすぐらく もやの中
 早だち旅人 いそぎ足
 松の木並ぶ あいだから
 ちろちろひびくは 何の音
 棚田のみどりの広がりに
 笈の真清水 そそぐ音
 (矢田 翠)



(原詩) 「路上書所見」(四) 前三一一六

紅旭生鴉背 紅旭 鴉背に生じ

行人踏紫煙 行人 紫煙を踏む

松間有清響 松間 清響有り

竹笈注梯田 竹笈 梯田に注ぐ

【大意】 旭光の紅が明け鴉の背に映え、旅人は美しい朝もや

の中を行く。松林の間から清らかな響きが聞こえ、見ると笈を伝って水が棚田へ注いでいる。

⑦ 「ホタル」

たそがれの 谷間にいっぱい ホタルが飛んで
 乱れて飛んで 岸辺も草も ホタル火飾り
 笹の葉透かしピカピカ光る
 藤の葉とおしピカピカ光る
 歌をうたって山道歩こ
 暗くなっても心配ないよ
 ホタルの光で帰れるさ
 谷間にかかった細い橋
 ホタルの光で渡れるさ

(中山 善照)



(原詩) 「螢七首」

後七—三

満溪螢火乱昏黄 満溪の螢火 昏黄に乱る
 透竹穿藤各競光 竹に透かし藤を穿ちて 各光を競

吟歩不愁還入夜 吟歩して愁えず 還た夜に入るを
 借将余照渡山梁 余照を借り將って 山梁を渡る

【大意】 黄昏の頃になると谷一杯にホタルが乱舞する。

竹の葉に透きとおおり、藤の葉をくぐり抜けて各自光を競っている。詩を吟じながら散歩して夜に入ってもなお心配はいらない。ホタルの余った明かりを借りて、谷川の橋を渡ればいいのだから。

⑧ 「天の川」

頭上にきらきら 天の川
 どこから来るのか このひかり
 となりの柳の こずえには
 雨雲どっかり 残ってるのに

(矢田 翠)

(原詩) 「雨後」

後七—一八

頭上星河爛爛開 頭上の星河爛爛として開き
 余飛知自那辺来 余飛知んぬ那辺自り来るを
 隣園高柳聳天半 隣園の高柳天半に聳え
 側有残雲屯未回 側に残雲屯して未だ回らざる有り

【大意】 天の川を見上げるとききらきら輝いている。その光は

どちらから来るのだろうか。隣の庭の柳は高々と天空にそびえ、その側には、まだ雨雲の残りが腰を据え、向山へ帰ろうとしないものがある。



⑨ 「雪の日」

北風ピューピュー

雪花、吹きあげ吹きおろす

渦巻つくって空かける

村の小道カチンコチン

霜のおけしよう

昼なおくずれず

(本安 俊三)

(原詩) 「雪日」 遺二—二三

北風吹雪片

北風 雪片を吹いて

乱舞半空漂

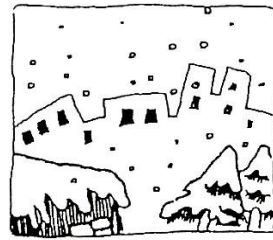
乱舞して半空に漂う

沙径牢如鍊

沙径 牢として鍊の如く

晨霜午未消

晨霜 午未だ消えず



【大意】 北風が雪花を吹き散らして、空中を乱舞して

いる。砂道は凍りついて鉄のように硬く、朝霜は昼になっ

ても消えそうもない。

⑩ 「冬夜読書」

ふりつむ雪が 山家をかこみ

木々の影が黒く深い

軒端の風鈴 ことりともしない

夜はしんしんと更けわたる

静かん とり乱した書物を片付け

ひとり疑問のことに

思いをめぐらせていると

その昔の哲人たちの心が

一筋の青白い灯の炎に

(岩川 千年)

(原詩) 「冬夜読書」 後三—一五

雪擁山堂樹影深

雪は山堂を擁し 樹影深し

檐鈴不動夜沈沈

檐鈴動かず 夜沈沈

閑収乱帙思疑義

閑かに乱帙を収めて 疑義を思えば

一穂青灯万古心

一穂の青灯 万古の心



【大意】 降り積もった雪が山中の我が家をかかえこみ、木々の影が黒

く深い。ただ夜だけがしんしんと更けてゆく。乱れた書物を収めて疑問

の箇所を考えていると、その昔の先哲たちの心が、一筋の青白い灯の炎

に照らし出されてくるようだ。

⑪ 「あさがお」

うちのあさがお かわってる
 中国から来た種という
 花は大きくあざやかで
 咲いてる時間も長いんだ
 曇りの日にはいつだって
 タぐれどきまで笑顔だよ



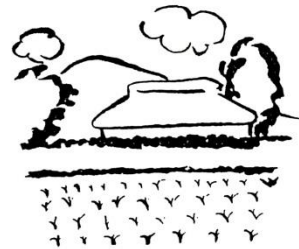
(原詩) 「秋日雑詠」(三) 後七一九

我圃牽牛種類奇 我が圃の牽牛 頗る奇なり
 伝言本自漳州移 伝え言う 本と漳州より移すと
 色濃花大能堪久 色は濃に花は大にして能く久しきに
 堪ゆ
 每値陰天晚未萎 陰天に値う毎に晩に未だ萎まず

【大意】 わが畑の朝顔の種類は相当変わっている。言い伝えによると、もと中国の漳州(福建省)から移したもののことだ。色は濃く花は大きくて長い間咲き続け、曇りの日はいつも夕方になっても萎まずにいる。

⑫ 「久しぶりの晴天」

梅雨の長雨二十日もつづく
 ところが
 今日はいれしいことに
 西の窓から夕日が入る
 すると
 茂った枝の間に
 ひな鳥元気に羽ばたき始め
 苔もかわいた石の上
 蟻が行列はじめたよ



(原詩) 「新晴」 前八一二

梅霖惱我二旬強 梅霖、我を悩まして二旬強
 忽喜西窓納夕陽 忽ち喜ぶ、西窓夕陽を納むるを
 杯密枝間雛習羽 杯密にして、枝間雛羽を習い
 苔乾石上蟻成行 苔乾いて、石上蟻行を成す

【大意】 梅雨の長雨に降りこめられて、ぱっとしない日がもう二十日余りにもなる。今日は、久しぶりに西側の窓から夕陽が差しこんできて、急にうれしくなる。木々の茂みの中では、ひな鳥が羽ばたきだし、苔の乾いた石の上を蟻が行列をつくっている。

⑬ 「晩秋スケッチⅡ」

「お花を 少々 下さいな」
 声は となりの 和尚さま
 「さあさあ どうぞ 菊に萩
 秋海棠も 副えましょう」
 「さつきはどうも ありがとう
 お礼のしるし」と届いたは
 とりたて まったけ かごの中
 たちまち かがりが 部屋いっぱい



(原詩) 「秋日雑詠」(十一) 後七一一〇

隣僧乞我小園芳 隣僧、我が小園の芳を乞う
 蕃菊胡枝秋海棠 蕃菊、胡枝、秋海棠
 忽挈一籃來作報 忽ち一籃を挈げ來つて
 帶泥松蕈滿厨香 泥を帶ぶる松蕈、満厨に香し

【大意】 隣のお坊さんが、我が家の小さな庭の草花を求めて来たので、蕃菊と萩と秋海棠を差し上げた。すると間もなく手提げの竹籠を携えてお返しにやって来た。泥がついたままの松茸が、台所一面に良い香りを放っている。

⑭ 「夏の日」

村のわらべは 塾がよい
 机に向かつて いるもの
 うだる暑さに きもそぞろ
 「子ノタマワク」蝉の声
 はあ やれんぞ やれんぞ
 「これにて終り」でとび出たが
 歩くにやまだまだ 日が高い
 木かげで牛飼う 友見つけ
 帰りは牛の背 二人のり
 はあ らくちん らくちん

(原詩) 「夏日雑詩」

村童日々挾書來 村童、日々書を挾んで來る
 講席偏愁暑若煨 講席偏 えに愁う、暑煨するが若くなるを
 歸路逢牛臥涼処 歸路、牛の涼処に臥するに逢うて
 直將牧豎置騎歸 直ち牧豎と置騎して歸る

【大意】 村の子どもたちが毎日書物を小脇に抱えて廉塾にやって来る。講席は火であぶるような暑さで、さぞつらいことだろう。でも心配することはない。帰り道で木陰に臥せている牛に出会うと、すぐに牛飼いの子どもと話がまとまり、二人乗りで楽しそうに帰っていった。

⑮ 「御領山大石の歌」

御領の山の いただきは

見渡すかぎり 石の山

大きな石は山のように

小さな石は家のよう

遠くで見れば 牛の群れ

近ごろ世の中 のんべんだらり

わたしはここで うさばらし

石よ、お前はこの山に

かくれているのが おにあいだ

わたしも石に なりたいよ

(武村 充大)

(原詩) 「御領山大石歌」 前二—二四

御領山頭大石多 或群或置鬮嵯峨

大者如山小屋宇 遥如萬牛牧平坡

吾嫌世上多猜忌 樂子無知屢來過

此日一杯発幽興 吾且放歌子妄聴

如今朝野尚因循 苟有所為触渠噴

憐子剛腸誰采録 不如聾黙全其身

石兮石兮林棲野處得其所

韜晦慎勿近囂塵 逢仙化羊已多事

参僧聴経非子眞 况作建平争界吏

况為下邳授書人

【大意】 御領山頭大石多し。或は群し或は置し嵯峨を闘わす。

大なるは山のごとく小なるは屋宇、遥かに萬牛を平坡に牧するが

如し。吾れ世上に猜忌多きを嫌う。子が知るなきを樂しんで屢來

り過る。

此の日一杯幽興を發し、吾れ且く放歌せん、子妄りに聴け。如

今朝夜因循を尚び、苟も為す所有れば渠の噴に觸る。憐れむ、

子が剛腸誰か采録せん。聾黙して其の身を全うするに如かず。

石や石や林栖野処其の所を得たり。韜晦慎んで囂塵に近づく勿れ。

仙に逢い羊に化す已に多事、僧に参じ経を聴く子が眞に非ず、

況んや建平界を争うの吏と作るをや。況んや下邳書を授くる人

と為るをや。

けいりゆう すなはま
溪流の砂浜に

すずみだい だ
涼み台を出しての。

こしか
腰掛けて

つき ま
月を待ちようた。

まえ やま
前の山から

つき はんぶん
月が半分ほどあがったー。

そのとき たらがの、

そりや ふうりゅう なが
そりや風流な眺めを

そそ
添えてくれた。

わのへ すな
童らは砂をあつめて

みず
水たまりをつくっての。

それに月を映してー

みず はげ
その水を激しゆう

かきまぜて

きらきらキラツと金鱗を

つくってくれたんじや。

(原詩) 「夏日雑詩」(九) 後八―二〇

涼棚待月向溪流 涼棚月を待ちて溪浜に向かう

恰値前峯上半輪 恰も値う 前峯半輪を上す

童子爲儂添勝概 童子儂が為に勝概を添う

聚沙激水作金鱗 沙を聚め水を激して金鱗を作す

【大意】 谷川のほとりで、涼み台に座って、月の出を待っていると、ちょうど前の峯から満月の半分が顔を出した。日中、私のために子どもたちが好い景色を添えようと、砂をあつめて堰きとめて、勢いよく水を流し込んで、その中に月を映して金の鱗を作って見せてくれたのだ。